

史料報

第 24 号

昭和51年 3 月

山形県史編さんと地域史研究

梅津 保一

(山形県史編さん主査)

山形県史編さん事業は、昭和三十二年にはじめられ、これまで十九年を経過した。当初は、通史二巻、政治篇一巻、産業篇三巻、交通篇一巻、文化篇二巻、資料篇三巻、総目・索引・年表一巻の編集計画であった。各篇とも近現代の解明をめざすものであり、ユニークな編集計画であった。県史編さんの発足と同時に産業篇(農業1・2)と文化篇の執筆を依頼したが、編集方針のあいまいさや執筆上の研究・討議の不足などが原因して、提出された原稿は不統一かつ未提出原稿もあり、編集・発刊にいたらなかった。

昭和三十五年ごろ、当初の編集計画を一部変更し(本篇十一巻・資料篇九巻、計二十巻)、本篇の編集に

は慎重を期し、資料篇の編集に力を注ぐことになった。資料篇の編集は

順調にすすみ、昭和四十四年までに十二巻が刊行された。本篇は、前記の問題点を克服できず、昭和四十四年に農業篇上、四十四年に農業篇中、四十六年に拓殖篇、四十八年に農業篇下の四巻を刊行したにすぎない。

昭和四十七年にいたり、こうした事態を憂慮して県史編さん検討小委員会が設けられた。小委員会は、十数回におよぶ討議を重ね、その結果を「山形県史編さんに関する要望書」としてまとめ、県知事へ提出した。

「要望書」では、「もとより、この業務は、他の一般行政とは大きく相違する特殊性を持っているが、今後課せられた使命に鑑み、反省改革

目次

山形県史編さんと地域史研究……

頁

「飯田家文書」の整理を終えて……

(1)

……梅津 保一……

近世史料目録の調査・収集と今後の課題……山田 哲好……(6)
歴史資料保存利用機関連絡協議会創立大会に出席して……鎌田 永吉……(8)
新収史料紹介・受贈図書・彙報……(10)

期に当面している」として、反省と問題点をつぎのように整理している。

(1) 当初計画に安易さがみられ、業務の性格と継続事業としての見通しに欠けていた。

(2) 「山形県史編さん執務要領」は条例等に基づくものではなく組織体制および業務内容とその責任性において欠くところがあった。ことに組織の上では、編さん員があるに止まり、各巻又は各部門ごとの責任が不明確であった。

(3) 編集方針が不明確で、かつ執筆者相互の十分な研究・討議がなされなかった。

(4) 編さん員および執筆者に対する処遇について十分な考慮が払われていなかった。

(5) 事務局職員の適正配置に欠ける憾みがあり、特に事業の推進力となるべき専門職員の配置に対する配慮がなかった。

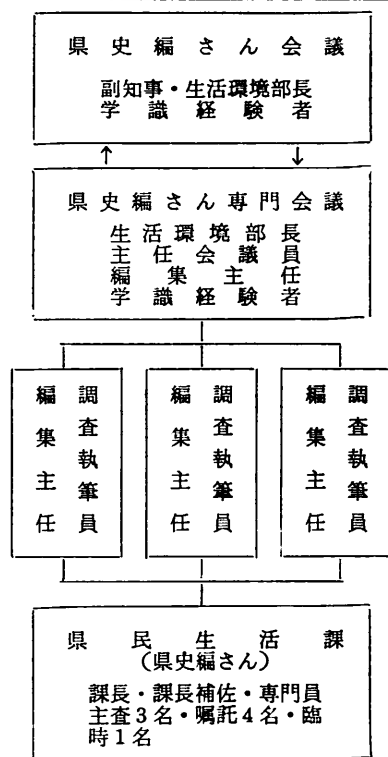
右の反省と問題点をふまえて、

「①事業計画の再編、②組織の整備③処遇等の改善、④事務局の強化」の四点について県知事へ要望したのである。この要望をほぼ県知事が了承し、昭和四十八年度から通史編を柱とした新十カ年計画をすすめていくことになり、面目を一新することとなった。すなわち、県では県史編さん員等の要望にこたえて、「山形県史編さん要綱」(昭和四十八年五月四日)を定め、事務局に専門職員(主査)三名を配置し、予算も倍増したのである。

(1) 本県の原始時代から現代にいたる発展過程を、世界史的視野に立つてあつづけるとともに、本県の歴史的特色を明らかにすること。

(2) あまねく学界の研究成果を取り入れ、高い格調を維持し、で

県史編さん会議・専門会議・各部会相互関係図



(会議)

(部会)

(事務局)

できるだけ平易な叙述につとめること。

- (3) 地域の生活文化を重視し、ひろく県民に親しまれるよう配慮すること。
- (4) 市町村史編さん事業と密接な連携をとり、相互協力をはかること。

さらに、県史編さん会議、専門会議、部会において、県史の編さん体制がととのえられた。

県史編さん会議は、県史編さんの大綱を決定する機関である(第七条)県史編さん会議のなかに、県史編さんの専門的事項を処理し、県史の監修にあたる専門会議がおかれている(第八条)。部会は、専門会議の決

定に基づき担当する篇巻の編集・執筆及び史料収集等を総括する編集主任と調査執筆員とからなる常設的研究共同グループである(第十二条)。

このようにして、山形県史編さんは一部の研究者による請負的な態勢からの脱皮がはかられたのである。このことも県内における地域史研究の成果と茨城県・長野県をはじめとする先進的な県史づくりの運動に学んでなされたものである。

二

県史編さん事業そのものは、直接的には県当局、本来的には県民の未来への展望と期待によって発足したのであるが、編さんにたずさわる研究者にとって、地域の歴史像をど

う構成するかは重要な課題である。

このことについて、山形県史近現代部会編集主任の森芳三氏の提案「地域史研究の意義と県史近現代史篇編集について」を要点のみ引用させていただく。

地域史のばあい、個別的特殊性と通史的・一貫性との調和の困難さがあるが、それは方法的な理由によるところが大きい。方法的原因の第一は地域史についての考え方、研究者の対応のうちにある。地域史は全国史の不可欠の部分であり、地域史研究は全国通史の再構成作業の一部という地位を占めるものである。方法的

に陥るだろう。たとえば、農村(村)の内在的理解に、農民の主體的な組織と動きをたえずキャッチできる研究体制的保障は、科学的分析の重要な要素となっている。

町村合併以降、市町村史編さん事業が盛んにおこなわれるようになったが、近現代史の内容の貧困さは著しく、住民にとって「近代」とは何かに答えているものは少ない。

自然破壊・地域破壊のなかで、地域住民は、自らの生活条件に自ら責任をもたねばならぬ実情を察知して各地で住民運動をおこしている。住民運動に合理性・科学性をあたえる地域(史)研究が求められている。

ここでは、研究は請負的におこなうことができなくなっている。いまや地域史研究は、地域づくりと密接にかかわる文化運動の一環として位置づけられよう。地域研究は、諸科学の有機的・集团的におこなわれる必要がある。そのばあい、研究者が地域住民とどうかかわるかが問題である。そのかわりかたに定形はないが、「ともに学ぶ姿勢と体制」、交流と相互啓発は欠かせないと思う。

三

ぼくらは、地域住民の手で、地域に根ざした歴史研究を創造していく

ことにつとめている。また、地域史編さんは、地域の大きな文化事業であり、住民の歴史意識形成にかかわる重要な文化運動であると考えている。それゆえ、編さんの過程そのものが地域に根ざしたものでなければならぬ、と思う。

山形県史編さんをすすめていくにあたって、開かれた「研究体制をつくる」とともに、市町村史編さん事業や民間歴史研究団体との交流と共同調査・研究を重視している。昭和四十八年度は、まず、通史編を柱とした山形県史新十カ年計画を県下四十四市町村全部に直接出かけていって説明し協力をおねがひした。さらに三つの地域（置賜・庄内・最北）で県史編さんと市町村史編さん・民間歴史研究団体との相互交流にウェイトをおく研究集会を開催した。昭和四十九年度には、全県下によびかけて県史研究協議会（十月十五日・十六日）を県立博物館においておこなった。この協議会において「史料の保存運動について」（横山昭男氏提案）と「山形県地域史研究協議会（仮称）の設立について」（村山市提案）が参会者全員の賛同を得た。前者については、山形県公文書館（仮称）設置についての請願書・要

望書が県議会・県知事へ提出された。請願書・要望書では、「①山形県でも、公文書館（仮称）を早急に設置し、県政百年の歴史資料の保存を図っていただきたい。②公文書館の設置にあたっては、その専門性に鑑み専門家や学識経験者の意見を尊重していただきたい。③新県庁への移転にあたり、歴史資料として貴重なものが多分に廃棄されることが予想されるので、公文書の選択保存について、前記の趣旨に沿うよう、特段の配慮をいただきたい。」といっている。この請願・要望は採択され「山形県歴史資料館（仮称）」は旧県庁舎（大正五年落成）の跡地利用のなかで検討していくことになった。しかし、地方財政の危機に直面して早期設置はむずかしいようである。ぼくらは、山形県史編さん事業が永久事業として「山形県歴史資料館」と一本化していくべきだと考えている。そのためには、現在、盛んにおこなわれている市町村史編さん事業や民間人の手による地域史の掘りおこし運動と密接に連携して基盤をつくっていく必要がある。

昭和五十年四月、ぼくらは山形県地域史研究協議会の設立趣意書と会則案三、〇〇〇枚を地域の歴史や現

状に関心をもち自ら歴史を担おうとする団体や個人に配布し、設立総会・研究大会を七月十九日・二十日（於天童市中央公民館）におこなった。現在の会員数は、四六団体、三一七名である。地域史研究協議会の目的と事業は次のとおりである。

「この会は、地域の歴史に関心をもち人たちが団体および歴史編さん関係者相互の研究と交流を目的とする。」

「この会は、その目的をはたすために、つぎの事業をおこなう。」

○地域史の調査研究

○歴史編さんの研究協議

○歴史資料保存運動の推進

○会報の発行

○その他の目的達成に必要な事業

このように、山形県地域史研究協議会は、地域史研究や県史、市町村史編さんの相互交流の場というだけではないに、地域の歴史像を考えあう場にしていきたいものである。現在、山形県下で、歴史編さん事業をすすめている市町村は、四十四市町村中、九市十七町二村あり、実に多数にのぼっている。すでに事業の完了したところは、二市七町一村ある。

しかし、各市町村の財政事情や取

り組みの姿勢のちがいもあって、これまで相互の交流はあまりなかった。しかも編さんのスタイルが定着しつつあり、歴史編さん事業を文化運動としてとらえているところは少ない。事務局が課（室）として独立しておらず、研究者の請負になっていくのが実情である。こうしたなかで、前述したような地域住民の手による地域に根ざした歴史編さんをすすめていくには、研究者自身が地域の歴史と現状に関心をもち人たちとともに地域史の掘りおこしを精力的にすすめていかねばならない。山形県地域史研究協議会の発足が、地域に根ざした歴史編さんの発展に寄与し、山形県歴史資料館づくりの土台となれば幸せである。

いま、地域の自然と歴史と文化を正しく住民のものにしていく地域（史）研究・運動が各地ですすめられている。この運動の背景には、小学校創立百年記念事業として盛んにおこなわれている学校史編さんがある。学校史編さんは、学区民が主体となり、地域の歴史の掘りおこし運動と結びついておこなわれている例が多い。地域住民が生き生きとして歴史編さんにたずさわっている姿に学ぶべき点は多い。

「飯田家文書」の整理を終えて

藤村 潤一郎

「史料館所蔵史料目録」第二十六集、下総国相馬郡藤代村飯田家文書の整理に着手して地図をみた。茨城県北相馬郡藤代町、交通路としては常盤線藤代駅下車だろう。土地勘は全くない。この地域で連想出来るのは一本刀土俵入と甲子園出場校の取手くらいで、藤代について知識はない。藤代の附近には小貝川が流れている。この川をたどると少しは思い浮ぶものがある。

小貝川が利根川に合流して、少し利根川を下ると布川、現利根町がある。ここは明治二十年に十三才の柳田国男氏が播磨から来て兄の家に身をよせた所である。八十四才の昭和三十三年に「故郷七十年」(定本柳田国男集)別巻第三、二〇頁の「布川のこと」では、七十年後の老翁が「最初驚いたのは」「驚いてしまった」「もう一つ驚いたことは」と、一頁に三度も繰返している。関西から関東に来て相当強い印象があったのだろう。

つぎに小貝川を遡ると鬼怒川に合

流する所に水海道がある。ここは松田道雄氏が生まれた所である。生後半年で京都に移住した氏の「京の町かどから」は、関東の風習と関西の風習とはさまれて成長した氏が、京都の風習を関東人の父母の目を通じて評価している点がある。

松田氏と柳田氏は逆で、同じ体験をした事になる。

こんな事を記したのは、私事で恐縮だが、土佐出身で東京に暮らしているからである。司馬遼太郎氏は、「土佐は僻地である。しかし僻地であるという劣等感はいまもむかしも土佐人は奇跡的なほどもっておらん」(歴史を紀行する)一四頁とし、城山三郎氏は「日本の辺境より一つの別天地の趣きがある。黒潮と太陽をわかち合い、人人は血で濃く結ばれている」(「風」一六九頁)としている。この僻地の人間が花のお江戸に來たのだから事情を御理解いただけると思う。

当館に職を奉じて文書を整理しているが、私の意識での村方文書の基

準はかつて整理した甲州下井尻村の文書である。しかし意識の下に土佐がある事も否定できない。しかも劣等感のない事は御多分に漏れない。結局多少客観性を欠くかもしれない。

初めて関東平野をみた時、林相の相異と平地に林があるのが奇妙な気がしたので思い出す。その関東平野の名主、本陣文書を整理するのである。

横瀬家文書、これが整理前の当館での名称である。明治二十五年に改姓したので近世、戸長役場の時代は飯田氏で文書の主要部分は同年以前のため改めたが、文書印は前者のままになった。これは失敗であり、最初に注意すべきであった。

さて宿駅本陣関係は初めてで従来の村方文書と区別がつかない点が多い。つぎに公文書と私文書だが、前記下井尻村依田家文書が浪人として名主を勤めなくなるため比較的私文書がはつきりしたが、今回は両者の区別に困難を感じた。これが村方文書では通常だろう。今後も考えた

い。

戸長役場文書では国税、地方税、營業税、雜種税の関係、村費、民費等と分類項目との関係など明治期の

知識がない。実は近世の村入用と他の項目との関係もよくわかっていなかったと思う。これらの点も含めて近世文書と戸長役場文書との繋がりを考えるべきだろう。

つぎに書状と書付の関係だが、戦国期には書状形式の普及があるとされている。古文書学について不勉強のため近世ではどうか問題だが、単に書状に限っても、幕末期には書状とすべきか、書付、願書、廻状にすべきか判断に苦しみ場合がある。これは戸長役場文書でも問題がありそうである。

なお天保二年孟夏高井蘭山述「消息往来詳註 全」には「上封あるハ書狀。上封なく半切紙の端を切封にせしハ手紙なり、切封なきハ口上書也。上包すとも糊を貼ずハ書付と云べし」とある。

さて飯田家文書は書店を通じて入手したから旧蔵者を確認していない。こういった場合には教育委員会に普通は照会するのだが、直接藤代に出かけてみた。町役場に行くのと役場と公民館の前に百日紅があり、その傍に「陸前浜街道藤代本陣跡」と記した柱が建っている。つまり旧蔵家はなくなっている。公民館で伺うと藤代中学校の前野茂先生を紹介さ

れた。授業の合い間に町の事を伺う。「ここはチバラキ県ですよ」と言われたのが印象的だった。水戸より利根川対岸が近いのである。

その後菩提寺である藤代町山王の金仙寺に連絡して子孫の野々下甲子男氏を教示された。同氏の都合でお会いするのが遅れるため、昭和五十年末に現地調査を行なった。

藤代駅に下車して山王行のバスを聞くと二時間近くない。仕方がないからタクシーに大枚を投じて乗る。

金仙寺に着いて過去帖の拝見を願ったが許可にならない。墓地は藤代にあるとの事である。藤代行のバスは又々二時間近くない。一度取手に出て国鉄で行きなさいと教えられるが、出張日数を考えるとそうも行かない。結局タクシーで来た道を歩いて帰る事にする。ところがトラックとダンプが走ってとてものんびり歩けない。歩きながら左手をみると土手がある。小貝川の堤防だ。

早速道をはなれて土手の上を歩くと竹藪、雑木林が左右にあり、対岸の様子もよくわかる。地図を片手に、これが近世の景観だときめこんで小一時間歩く間、盛んに写真を撮った。

昼過ぎに藤代につき学期末で多忙

な前野先生に伺うと、あの土手は昭和二十五年の決潰後に家を移して出来たもので、位置も高さも違うと言われた。近世のものと考えたのは笑止の至りである。同情された先生の御高配で公民館の自動車を出して呉れる事になり、小貝川の堤防、岡堰、間宮林蔵の墓と家、附近の農家などを見学する。岡堰は愛知用水の犬山取入口を小型にしたもので、これにより、従来の顕田が乾田になった事など伺った。

翌日再び公民館で墓地を伺ったがわからない。藤代宿の相宿である宮和田宿の文書が同町の宮和田勇次氏が所蔵している旨を教えられた。手土産を町の食料品店で買ったが、あきらめきれないので主人に墓地を聞くと相馬神社の裏だと教えられる。拓本の道具を忘れたので休日の文房具屋に飛込むと脇本陣だったが改築で文書はない。主人夫妻が相手になって呉れて町の話を伺った。それから夕方迄風の中で墓碑を調査した。伺った話の中で、寺田先生はエライ方で、先生が出席しないと神社のお祭が出来ない旨の事があった。寺田先生とは眼科医で藤代村下組名主である。文書は所蔵していない由であった。飯田家は上組名主である。

この両家は共に除地を持ち、世襲名主と考えられる。

大正七年野口如月著「北相馬郡志」には寛文期に鎮守祭礼で三年交替で両家が上席を占める慣例とある(二五八頁)。これは恐らく飯田家も話の寺田先生と同様の受取り方を村民にされていた事を示している。

そして幕末の関東御取締御出役の際の取手藤代宿組合村では飯田氏は藤代宿大惣代を勤めている。この組合三四カ村は岡堰用水組合、藤代宿定助郷村と合致している。

さらに明治前期には戸町長を連続勤めている。これらの事からすれば、飯田家は村内で相当の地位にあったのではないだろうか。

さて次の日に改めて宮和田家に行くと文書の大部分は某氏が借用して返していない。残りは取手一高の先生が研究して保管して貰っていると云う。取手一高では二学期の終業式の後に残っておられた浅井昭治先生が水戸出張を便おくらせて相手を下させた。感謝にたえない。

年があけて野々下家を訪れ、御好意にあずかり、やっと現地調査を終える事が出来た。

これで簡単だが、私なりに現地の方方にも会って話を伺ったり、歩い

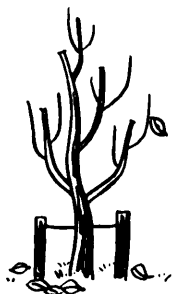
たりして、少しは理解を得たと思う。

ところで松田道雄氏は前記の著書(十一―二頁)で、京都を理解するために、自分が京都の人間としての日常を生きねばならなかった事を述べ、せまい日本の関東と関西でもお互の風習を理解するのは容易でない。文化は風習を反映しているから十分風習を理解する事が必要だと記している。

私の短期間の調査で理解したとは思わないが、地図と文書のみよりは理解の糸口をえたと思う。

古文書を整理する事は、文書のうしろにいる書いた人間、そのまわりにいる無筆の人人を理解する事だろう。彼等の風習や社会や環境等を考えなければならぬ。

整理を含めて、文書を読むと言うことは難かしい事だと思ふ。



近世史料目録の調査・収集と今後の課題

山田 哲好

戦後の地方史誌編纂事業は、その実体を把握することすら困難なほど急速に進められた。就中、一九六〇年代以降は、地方自治体が当時の政治的・経済的条件を背景として一層活発化したことも周知のことである。近年、各地において史料保存運動が高まり、文書館・史（資）料館等の保存機関が設立されてきたのは以上のような情勢が契機となったとも言えよう。さらに、地方史誌編纂事業の一環として、史（資）料集や史料目録の刊行も夥しく、とりわけ史料目録に関しては、地方自治体が刊行するだけではないので、その実体把握を一層困難なものにしている。そこで、当館における事業計画を顧みながら、当館所蔵の近世史料目録の概要と、今後の整備体制への課題について若干述べることにする。

戦後の混乱期、地方史料の散逸事情が甚しかった最中、昭和三年から二八年まで、文部省科学研究費総合研究として全国的な史料所在調査

う。

が行なわれた。その結果は、「近世庶民史料所在目録」（日本学術振興会・昭和二七・二八・三冊、以下「庶民史料目録」と略す）として刊行された。因みに、各地方ごとの内訳は、北海道地方一四三件、東北地方六三九件、関東地方四二七件、中部地方一八一七件、近畿地方四〇一件、中国地方三一五件、四国地方二九一件、九州地方三九六件で、合計四四二九件が収録されている。全国の一件ごとの目録の原簿は、当館と京都大学が所蔵するほか、各地方別にも分散保管されている（詳細は前掲書、特に第二輯を参照されたい）。この原簿を当館では現在も閲覧に供しているが、実際に史料に当たられる場合は、かなりの年月を経過しているために、所蔵関係の移動等によつて様々な障害があることは否めない。しかしながら、戦後の間もない時期に、全国に及ぶ組織的な調査を実施したことは、戦後の地方史料保存運動に先鞭をつけたこととして高く評価しなければならないであらう。

この近世庶民史料所在調査を引継ぐ形式で、昭和二八年度から四一年度まで、近世史料の所在調査を行なった。これは、当館における重要任務の一環として各県一名ずつに依頼した地方調査員によって行なわれたもので、この調査報告の結果は、「近世史料調査概要」（昭和四六刊）にまとめられ、四一一件が収録されている。各地方別の内訳は、北海道地方六件、東北地方四九件、関東地方八九件、中部地方四五件、近畿地方七五件、中国地方五七件、四国地方二〇件、九州地方九件の三五〇件で、この他は、「庶民史料目録」に脱漏の分を収録したものである。言うまでもなく一件ごとの詳細な目録は現在でも閲覧に供してはいるが、その調査方法や対象地の設定に関しては、当時の諸般の事情により不合理な面もあったことは否めない（本誌第五号参照）。

地方史誌編纂事業がとりわけ盛んになった頃、昭和四五年、近世史料目録の調査を行なった（本誌第二二号参照）。この調査は、近世史料目録の全国的・体系的収集整備を目的としてなされ、各都道府県立の中央図書館、文書館等を対象にして行な

ったものである。この結果、関係各位の御理解と御協力によってかなりの成果をあげることができた。当時、当館所蔵の近世史料目録は五七〇点で、御回答頂いたものがこの他に五四六点、このうち、「日本地方史誌目録総覧」（国立国会図書館図書部編、昭和四五年一二月末までの分を収録）に未収録のものが三三三点であった（シリーズ形式のものは一点としたので冊数を示すものではない、以下同、本誌第一八号参照）。このことは、史料目録作成に関する情報は、最初に述べた如く、その把握が如何に困難であるかを我々に示してくれるものであろう。史料目録の発行者は、その大半は地方史誌の編纂室で、他には図書館、文書館・史（資）料館等の保存機関、さらに大学研究室等の研究機関が主である。その最も中心を占める地方史誌編纂室の場合、編纂過程において目録が作成されていながら確認することができない所謂「内部史料」の目録は相当な数にのぼるであろう。編纂事業が終了となるに及んで公開されるであろうが、「内部史料」という性格上、諸般の事情でそのまま未公開にされてしまうのは、目録作成の意図を失ってしまうのではなからう

か。史誌編纂室は、一定の期間内に一時的に設置され、事業終了後は直ちに解散となり、その際も事務的な引き継ぎが十分なされていないのが現状であるかのように思われる。永続性のない編纂事業のあり方にも問題があるが、以上のことからしても史料目録の体系的な収集・整備は決して容易なことではない。

昭和四五年の既調査目録の調査に続いて、未調査史料の所在調査が昭和四九年度から開始されて現在に至っている（本誌第二二・二三号参照）。この調査は、地元の方々を中心に当館からもそれに協力するたちで行なっている。現在のところ毎年二ヶ所程度しか実施していないが史料の地元での保存管理という理想的な運動が定着してきた現状を踏まえて、今後はこのような調査を拡大し、当然、目録も公開していかなければならない。

さて、前述の既調査目録の調査以来、関係各位から御協力を頂いており、誠に感謝に堪えない。寄贈いただいたり、当館の購入によって受入れた史料目録の在庫数（昭和五十一年二月現在）は、史（資）料目録五二六点、特殊文庫目録一三六点、行政資料目録一六六の計六七八点で、冊数

及び、各文書所蔵者の件数となるとかなりの数にのぼる。これら大量の目録を今後、如何に整備していくか重要な課題としなければならぬ。以下、この点に言及する前に、当館所蔵の地方史誌類に関して、どのような分類整備を行なっているか簡単に紹介してみることとする。

地方史誌類は、一般図書と同じくN・D・C（日本十進分類法）に準拠して、それぞれの地方（都道府県）に分類し、それをさらに内容によって区分している。その概略は、目録類（図書館の蔵書目録、文献目録等の一切の目録類を含む、一〇八三点）これは、昭和五〇年二月現在の在庫数で、同じく冊数を示すものではない、以下同）、県史（一二二点）、郡史（一八二点）、市・区史、これに伴う史（資）料集（五一九点）、町村史（五八三点）、教育史（三二点）、叢書・史（資）料（二二〇五点）、個別研究（三六二点）、文化財（三三〇点）、というように区分している。特に、目録類については、一点ごとの基本カードは書名カードとし、地方分類は勿論、発行地を基準にしている。この基本（書名）カードの他に編者別、所蔵者（団体）別の副出カードを作成している。こ

れは、特に史料目録の多様な検索の利便に応じるためであることに他ならない。前述したように、史料目録は発行者が様々であることと、文書所蔵者と目録発行者の地域が異なる場合も多いこと、さらに、管見する限り、逐次刊行物（主に地方史関係の学術雑誌）や、史（資）料集、あるいは図書館の蔵書目録に収録されている場合もある。従って、一地方の史料調査がどれだけ行なわれ、又その結果どのような目録が刊行されているかという点に関しては、従来の分類方法ではなかなかその全体を把握することが困難である。この問題を解決するための一つの方法として、副出カードと関連するが、文書所蔵者一件ごとのカード化を図り、これをそれぞれの地域へ分類する。その際には、収録されている書名なりシリーズ名なり、その出典を明記する。これに加えて、「庶民史料目録」（既に一件ごとの文書所蔵者名のカード化は完了している）に収録分の四四二九件、「近世史料所収調査概要」に収録分の四一一件、両者合せて四八四〇件を含めると全国的にかなり体系的な把握が可能であろう。

こうした史料目録の整備の方法は

実際には様々な問題があろうし、莫大な労力が必要となろう。しかし、史料目録は、まずもって発行地の適当なる機関に収集整備され、利用者の便宜を図ることが第一である。一方でこれらの史料目録を体系的に収集整備する適当な中央機関で、その全体を閲覧検出することが可能となるなら、とりわけ近世史料目録の言わばデータベース的役割としてこれに過ぎるものはない。

以上のような計画は、当館のみではその情報を把握することすら不可能であり、関係諸機関との情報交換を行ない、それを定着させなければならぬのは当然のことである。そのためには、まず各都道府県においては、適当なる機関で情報を確実に把握するための然るべき手段を講じることがまずもって必要となろう。それを当館との情報交換（できれば年一回は定期的）を行ない、その結果を各機関に報告するというようなシステムが考えられないだろうか。昭和四五年、既調査目録の調査を関係諸機関の御協力によって行なった際、その結果は本誌第一八・二二号に事後報告程度がなされただけである。このようなことでは、御協力頂いた関係諸機関に対して、何

ら還元されるものがなく、ただ情報を収集したに過ぎないという結果は否めない。当時は、「近世史料目録の全国的・体系的収集整備をおこなうために、いわば第一次五カ年計画」(本誌第一二号)としてであったが、この第一次計画年度が終了した段階で、事後報告程度ではと、その一半の責を負いながら述べてきた次第である。

今後の課題は、以上のような方法によって史料目録の収集・整備が一段落した時点で、「近世史料所在一覧」などのかたちで刊行頒布して、研究の利便を図る(本誌第一二号)り、

当館所蔵分については、閲覧体制の早期確立を図らなければならない。又、地方史誌類についても、何らかの情報公開を漸次実現できるようにしたい。それ以前に、現実問題として解決しなければならない問題も少なくない。例えば、年間の地方史誌類(もちろん史料目録をも含めて)の購入予算額があまりにも少ないことや、これだけ莫大な労力を必要とする事業に応じるための人員が少ないこと等である。特に、史料目録の整備に限っても問題は多い。第一にこの作業は恒久的に続けていかなければならないと同時に、基礎的デー

タの作成はできるだけ短期間に完成する必要がある。又、公開データについては、その主要なものの複数化をも考えなければならない。さらに重要なことは、この作業が恒久的に行なわれなければならない故に、既調査分の文書所蔵者の追跡調査がぜひとも必要になってくる。特に「庶民史料目録」については既に二〇数年が経過しているので、ここらでも一度確認する必要がある。それ以後のものについてと、今後の調査分についても一定の周期を設けて追跡調査を行なうことを考えなければならない。

現在の情報閲覧室の二名の定員で日常業務の他に史料目録の整備を短期間に達成することは困難である。少なくとも、史料目録の収集・整備を全体のなかにどう位置づけるか、そのための要員、予算などの具体策を含めて、早急に決めなければならない。さらに基礎データをもとに一層完全なものとするために、各種の目録を累積していく体制づくりや、整備した目録資料の情報提供の方法についての具体策も必要である。

終りに、今後共、関係諸機関、及び関係各位に対して、一層の御理解と御協力を御願ひする次第である。

歴史資料保存利用機関連絡協議会 創立大会に出席して

鎌田 永吉

一

歴史資料保存利用機関連絡協議会の創立大会は、去る二月二一・二二日の両日、山口市の山口県文書館・市内山泉荘等を会場に、北は北海道から南は沖縄県まで、四六の関係機関から約七〇名が参加して開かれた。

この会結成にいたる経過・背景や大会の目的・意義等については、本誌第二二号所載の茨城県歴史館、佐久間好雄氏の寄稿文に明らかであり、今回の創立大会についても、近く発行が予定されている会のニュース等で詳細な経過・内容が報道されるであらうから、ここでは紙幅の関係もあるものでそれらについては省略させていただきます。出席者の一人としてのきわめて個人的な感想と希望などを書きとめておきたい。

二

大会は、第一日目前半に創立総会の討議が行われ、後半は、高野修氏

による「行政文書の収集と整理における藤沢文書館の問題点」、鈴江英一氏による「公文書の収集と公開について」、および広田暢久氏による「山口県市町村行政史料の調査について」の三つの報告を中心とする研究協議があり、二日目は、山口県文書館の施設見学後、参会者からあらかじめ提出されていた討議主題や各自の直面している問題点を素材に研究協議と情報交換が行われた。

結成準備過程を若干承知していたわたくしとしては、正直なところ、第一回目の会合にこれほど多数の参会者が集い、白熱した論議が続けられたことに、ある種の驚きと感動を覚えたものである。準備事務局の人たちの、二年間にわたる周到な準備とその熱意は当然のこととして、設置形態や、職種も業務の量・質や到達点などにも、それこそ機関の数ほど相違があっても、この人たちをこれほど一堂に結集させ、その情熱を一体なんであつたのか。

これまでの史料保存・利用、文書館問題は、主として利用者（学術団体）サイドから叫ばれ、運動が進められて来ており、提供者（機関）側の直面している内奥の問題は、社会的発言として欠如していたきらいがある。内外の文書館視察報告なるものも、そこにどんなに良い史料があり、どんな良いサービスが受けられたか、という観点のものが多く、例えば、一枚のカードがどんな手続きで作成され、整理や分類はどうやら、それに関わる職員がどんな条件の下で労働しているのか、情報は相互に不足している。近時は、はなばなしいかけ声をよそに、史料保存・利用問題、文書館業務は、行政（財政）の谷間に押しやられて来ている。そうした矛盾を見極め、現状打開の方途を、研究者であると同時にサービス者である人間が、機関内部あるいは相互の共通の課題の中から発見していくことが、第一次的に必要だという共通認識があり、あえていえば危機感が根底にあった。

しかし、それだけではない。機関が収集・保存している史料は、第一次的には、何よりも、国民、地域住民へのサービスのためにあり、機関は、そこでの住民の日常生活や自治

体行政が直面している課題と密接につながって存在している。かつて、長光徳和氏は、岡山県文化センター郷土資料室の仕事を通じて、地域開発や公害問題、果樹栽培の現状に関する資料を市民に要求されても、満足な資料を提供しえたためしがないと、自省をこめて嘆かれている（本誌13号寄稿論文）。

市民の要求や行政の最先端の課題をうけとめるべき機関の職員として、われわれにはどのような資質と姿勢が要請されているのか。日頃、業務の本質論の討議をさせて、個人の研究論文量を産を事としている面は、本当にないのか。藤沢文書館の高野氏の発言は、内側からの発言として看過できないものであったと思われる。

三

鈴江・広田両氏の報告も、実務の第一線の側からの問題提起として、それぞれに貴重なものであった。今回は期せずして近代・行政資料の報告に集中したが、現実の諸機関は同時に近世文書を大量にかかえ込んでいる。そこでは、例えば、近世・近代（仮りに戦前までとする）・行政資料について、それぞれ、体系的な調査・収集・整理・分類・閲覧サービスの方式が検討され、確立されねばならないであろう。とくに、日々量産される行政資料（文書・印刷物を含む）について、どんな基準をたてて収集し、保存・整理し、どういうサービスをするか、あるいはなしうるか、が各機関の関係者が直面している共通の課題であることは、この会の前身である懇談会以来、確認されて来たところである。ここでは、専門的・理論的な検討と同時に、一方で行政ベースの中で現実的な処理方式もつくっておかなければならない。

文書館等の機関においては、第一に、専門領域の研究者集団による不断の持続的研究・討議を通じてこれらの課題に取り組むことが要請されるし、第二に、それは近世文書を含む歴史的資料を対象になさなければならない上、第三には資料は、原則として常時・不特定多数の人への平等公開利用に供されなければならない。前述の、市民・行政とのつながりも、このことを前提に論議されなければならないことは明らかであろう。

とすれば、この会は、あくまでも統計資料等を中心とした庁内利用を

本来の任務として出発した、都道府県行政資料室等の連絡組織である「行政資料連絡協議会」とは異なった目的と機能を持つものとして、それと併存・提携・協力しながら独自の発展の方策を求めて行くことを、今や客観的使命としてになわされて来たように思われる。

この点は、理念としても、現実の方途としても混同されることなく、双方の長所なり存在意義なりを伸長して行くことを、両者がお互いに認めあい協力して行くことが最も必要であり、その逆であつてはなるまい。もちろん、現実には地域・機関の諸条件に差があり、過渡的には画然としない問題があることは否定できないが、わたくしは、両者共にその望ましい発展を期待する条件はじゅうぶんにある、との念をますます深くしている。

四

とにかく、会はスタート台に立った。いまのところ、会の創立も今後の運営も、関係者の個人的情熱とエネルギーに依存している面が強いことは否定できない。研究者であつて同時にサービスマン（ウーマン）に徹するとはどういうことなのか。矛

盾はかかえこんだままである。学界や理事者側の協力と理解ももちろん必要であるが、課題は、いままず己れ自身の内部にある。それに、主体的にかつ積極的にかかわりあって行

こうというこの人びとの姿勢と情熱は、何よりも各機関の首脳部や周辺の理解と声援に支えられて来たし、これからもそうであってほしい、と念願してやまない。

昭和五〇年度 新収史料紹介(二)

⑨はマイクロフィルムによる収集を示す

受贈史料

水野成夫氏収集記録

本記録は、故水野成夫氏の収集にかかるもので、同氏の未亡人はな氏のご意志により当館が寄贈を受けたものである。幹旋の労をとられた二宮クララ氏(成夫氏のご息女)ともども、水野氏のご好意に対して、改めて謝意を表したい。

今回寄贈を受けたものは、「山鹿語類」全四五冊、「古今戦略考」一冊、「諸法度集」二冊、合計四七冊の写本(いずれも美濃判)である。このうち「山鹿語類」は、首巻は序文及び惣目録を載せ、その表紙懸紙に近時の筆跡で「山鹿旗之進蔵」とあり、また尾巻末尾に「右山鹿語類全部四十五冊奉承公命而謹写焉(中略)惟時安政四年丁巳秋八月小野尚雄謹誌」とある。

一方、明治四三年四月、国書刊行会刊「山鹿語類」第一、校訂者識語に「本書従来未だ刊せられず。今本会は素行の後裔山鹿旗之進氏所蔵津輕家蔵本伝写本を底本と為し」とある

ので、これを総合してみると、本書は、もと津輕藩士小野某が君命によって筆写した津輕家旧蔵本(原本は未詳)が伝写されて(筆写人は不明)藩士山鹿家に伝蔵されていたものと思われる、明治四三年に国書刊行会本の底本として使用されたものと同じものと推定される。事実、本書と国書刊行会本は、前記小野尚雄記述の部分を除けば、その体裁はほとんど一致する。

つぎに、素行編述にかかる兵法書「古今戦略考」一冊は、推定するに

その目録部分のみであり、「諸法度集」としたのも、鎌倉以降江戸幕初にいたる諸法令を集載したもので既知の編纂物との異同はいま考証できない。以上三部とも「山鹿蔵書」印があり、筆跡は同一人と推定される。本記録を故水野氏が収集された事情・年代など、いまは一切不明であるが、今後判明の機会が得られるものと期待している。なお、津輕山鹿流兵学関係の記録類は、当館所蔵「津輕家文書」に収められていることも、本記録の当館受入れの機縁となったものであり、両者の併用により研究が前進することを期待したい。(旧蔵者Ⅱ東京都杉並区永福二―三―二三。水野はな氏)

⑩信濃国 真田家文書

真田家所蔵文書のうち、藩士の系譜類を収録したものである。内容は「御家中系図」十二冊、「(家)中家譜」七帙、「(家)系補録」十五冊、「(家)中家譜」六括の四種である。

「御家中系図」は、いろは別に各家の系図を示したもので、初祖の由来、各人の略歴、夫人の出自など記述には精確があるが、寛政頃の真田家中の全系図にふれている。なお、

巻初 of 註によれば、本書は奥津湖山が編輯し、望月氏が増補したものという。他の三種は、いずれも各家ごとの系譜を仮りに集めたもので、内容としては各人の履歴の詳細を示す重要な史料である。ただ、惜しいことに三種とも不完本で、脱漏している家がある。

本史料は、当館所蔵真田家文書を補完するため始め信濃史料の米山一政氏のご教示により、宮下劭氏(藤沢市在住)が所蔵されているものを当館で調査し、のちに真田家に移されたものを同家において収録したものである。関係者のご好意に改めて謝意を表する。(原蔵者Ⅱ世田谷区宮坂一―三〇―二 真田幸治氏。総点数四〇、六リールⅡ四二四三コマ)

⑪信濃国 真田家文書(長野市所蔵)

長野市松代の旧真田邸(文久三年造営・県文化財指定)に保管されている膨大な松代藩政史料群については、昭和五〇年八月に、長野県史編纂委員会等々の各位と当館により旧真田邸職員各位の御協力を得て史料所在調査が実施されたこと、本誌前号六―七頁に詳しい。その後、当該

所在調査によっても残された未調査史料に関しては、同年一〇月以後、長野県史編纂委員会の各位によって調査が続行され、史料目録も次々に作製中の由である。

当館でも、現在、当館所蔵の真田家文書（総点数約三万点）の史料目録刊行を目指して作業が進行中であるが、当館分の史料を補完するべく長野市保管分の史料の特に基礎的藩政史料を中心にマイクロ収集を行った。主なものは以下の通りである。

(1) 「真田幸貫御役中日記」二冊
本史料は、幸貫が天保一二年六月から同一五（弘化元）年五月まで老中職に在任した際の役向日記である。

日記は「下調」と題する下書と、清書された「御日記」との二種類から成る。残存は幸貫老中職時代の全期に及ばず、いずれも天保一二年の就任直後から同一三年五月までの最初の一年間であつて、清書された「御日記」には猶欠本があるが「下調」は完全揃である。

(2) 「監察日記」一五冊
本史料は享保六年から明治四年に至る一五冊が完全に保存されている。監察方の日記原本からの抜粋と思われる、藩内の諸事件・家臣人事・賞罰の主要なものが網羅されている。

(3) 「留守居方日記」三四冊
本史料は江戸留守居当番の日記で、文化年間から元治年間に及ぶ江戸方公用の基本史料であり、また当館所蔵の多数の役方日記を補完するものである。

(4) 「御勝手向書類」他 若干点
本史料は、大量の箱入り代々藩主御手元文書の中から財政関係の基本史料を適宜抽出して収録したものである。「御勝手向書類」と表書された袋入り史料には、天明文化期の幸専時代財政史料、「御積帳」・「江戸御在所御定例之御払辻調一紙」等があり、いずれも儉約令と関連したもので、家臣の儉約内密上書などを含む。その他、献金人別書上帳、年貢収納関係書類などを適宜に収録した。加えて、幸貫に関する「一誠齋紀実」一冊、「家譜略伝」二冊などを収録したが、これらは真田家文書のほんの一部分にすぎず、猶今後の調査に期す部分が多い。

今回の調査に当つては、前回の史料所在調査と同様に、保管者である長野市旧真田邸職員各位の全面的なご協力と、長野県史編纂委員諸兄のご援助を頂いた。（現蔵者＝長野市総点数約一〇〇点、二九リール＝一八二九四コマ）

⑧ 京都柏原家文書

昨年度にひきつづいて、柏原家（店名前、柏屋孫左衛門）の営業関係の史料のうち、江戸本町四丁目店の勘定目録を収録した。

前々号にも触れた通り、京都問屋町通り五条下ル橋町西側に本拠を構え、天和・貞享の頃に江戸に進出したと伝えられる同店の取扱商品は、当初の小間物・呉服類から木綿・緑綿に主力が移り、その他、下り蠟燭・雪踏等を扱うなど、時間的に品目やその比重に変化はあるが、元禄八年に始まる同店から京都本店へ宛てた決算報告書類（毎年三月、年一期勘定）は、明治一七年に至る一九〇年間、一年の欠年もなく完全に保存されており、浮沈の多い商家にあつて、その堅実な経営が偲ばれると共に、決算書類という史料の限界は否めないものの、典型的な江戸十組問屋商家の営業の実態を窺うことのできる貴重な史料といえる。因みに幾多の経済変動に耐え抜いた、その堅実な商法を裏付ける同店の決算書類の整備の状態を、文化一四年丑三月の例で示せば、次の通りである。

- (1) 勘定目録 老冊
(2) 下り荷物差引書 老通

- (3) 為登金高書 老通
(4) 新為替金高書 老通
(5) 諸国買物高書 老通
(6) 京都為登物書 老冊
(7) 掛ケ高集帳 老冊
(8) 紙店差引書 老通
(9) 難船損毛書 老通
(10) 掛ケ抜捨書 老通
(11) 店諸小遣高書 老冊
(12) 居屋敷普請諸入用書 老冊
(13) 抱屋敷繕普請諸入用書 老冊
(14) 地面抱屋敷入用書 老冊
(15) 冥加金上納覚書 老冊
- 見られる通り、系列店の紙店（新両替町松阪屋半右衛門名前）分を含めて、総括的な決算書たる勘定目録の数字を傍証する各勘定課目別の明細書が添付されており、その仕入・販売に関する経営動向を知り得るばかりでなく、店方の諸経費に関する明細などは、江戸住民の日常物資の小売物価の連年の数値を知り得るなど、多様な内容を有するものである。なお、予算の関係上、今年度は文政十三年度以前に止まり、天保以降の分については次年度継続しての撮影を予定している。（史料所蔵者＝京都市東山区問屋町通り五条下ル西橋町洛東遺芳館。収録フィルム二五リール＝一三、四八〇コマ）

受贈図書 昭和四十九年度(三)

山形県教育史資料 第二卷
岐阜県立図書館郷土資料目録 第一集
郷土関係資料目録 第四集〔明石工業高等専門学校〕
県立長崎図書館郷土資料目録 増加補遺
山形市史 下巻

福島市史 一二

文化財の保護 第七号〔東京都教育委員会〕

奈良教育大学増加図書目録 昭和四六・四七

蔵書目録 第三卷〔東洋大学図書館〕

常滑市誌 別巻常滑窯業誌

リッカー美術館所蔵浮世絵名品集〔平木浮世絵財団〕

会津藩城下明細図・会津鶴ヶ城御本丸の図〔加藤長四郎〕

宇部市内の金石文・石造記念物所在一覧〔宇部地方史研究会拓本をとる会〕

前田育徳会・尊経閣文庫〔要覧〕

別子銅山図録〔住友金属鉱山KK〕

和歌山市史編輯史料叢書 (4)・(5)

明治前期日本経済統計解題書誌―富国強兵篇(下)―〔細谷新治〕

雲海 第一三〇・一四七号〔鈴木正敏〕

鶴岡市史 中巻

瀬戸内海歴史民俗資料館展示品目録 I

入門近世文書字典〔林英夫他〕

鯖江藩寺社改牒〔竹内信夫〕

宝塚市史 第一巻

兵庫の人権の歴史―解放の道求めて〔県民のための人権の歴史編集委員会〕

〔甲斐国志草稿本及び編集諸資料〕調査

報告〔山梨県教育委員会〕

増加図書目録 一〔山形県立図書館〕
千葉大蔵書目録 人文科学社会科学・自然科学工学産業

演劇博物館蔵書目録 第二十号

青森県埋蔵文化財調査報告書 第一七

二〇集〔青森県教育委員会〕

奥田家文書 第十・十一巻〔大阪府立図書館〕

会員名簿〔叢会館〕

北海学園大学増加図書目録 第一七・九一〇号

県立長野図書館蔵書目録 第五巻

半田市誌 資料篇村絵図集

武蔵野市史 史料目録編二

造幣局百年史 資料編

真田邸宝物館の概要

象山記念館

邪馬台国の歴史〔坂田隆〕

東恩納寛惇先生著作論文目録〔稿〕〔沖縄県立図書館〕

山梨県立図書館所蔵古文書目録 I

国立国語研究所資料集 八〇九

沖縄県立図書館要覧 一九七三年度

沖縄県立図書館「八重山分館」〔要覧〕

愛媛県編年史 第八・九

古河市史資料 第二集

甲州文庫史料 第三巻〔山梨県立図書館〕

昭和五十年 度 (一)

鹿兒島県史料 旧記雑録追録 五〔鹿兒島県維新史料編さん所〕
青森県埋蔵文化財調査報告書 第二三集
〔青森県教育委員会〕
山形市史資料 第三十九号
図録 日本の貨幣 八〔日本銀行調査局〕
市川市史 第三・四巻
東京都議会史 第五巻下
函館市史 史料編第二巻
神奈川県史 資料編十八
岩見沢市史資料 第四集
横浜市史 資料編十四・十五
港北ニュータウン地域内文化財調査報告
IV〔横浜埋蔵文化財調査団〕
長野県史 近世資料編 第三巻
小学館学習百科事典 四
人物探訪日本の歴史 八・十四〔映教育図書〕
書の日本史 第六巻江戸〔平凡社〕
日本の文様 六 器物〔光琳社〕
好色五人女 グラフィック版〔世界文化社〕
香川大学増加図書目録 昭和四十八年度
鳥取大学附属図書館蔵書目録 第五巻
尼崎市史編集資料目録集 二十五・二十
六
〔大阪府〕 阪南町史資料目録 第二集
収集資料月報 №十七・十九〔京都府立総合資料館〕
滋賀大学経済学部付属史料館所蔵史料目録 第十四集
愛知図書館参考図書目録 一九七五
愛知県立大学図書目録 (5)
増加図書目録 昭和四十九年〔松本市立図書館〕
金沢大学理学部論文および著者目録
近世史料所在調査報告 十〔埼玉県立浦和図書館〕
秋田県歴史資料目録 第十一集〔県立秋田図書館〕
田図書館
解題書目 第五集 多門院文書〔青森県立図書館〕
教育研究報告書件名目録 V〔北海道立教育研究所〕
北海道所蔵公文書件名目録 四〔北海道総務部行政資料室〕

学術文献収報 第一六一～一六四号〔北海道教育大学附属図書館〕

小樽商科大学増加図書目録 昭和四十八年度

北星学園大学図書館増加図書目録 第三号

太政類典目録 上巻〔国立公文書館〕

日本外交文書 大正十年第二冊〔外務省〕

東京教育史料大系 第一～十巻〔東京都立教育研究所〕

東京都教育史料〔戦後学校教育編〕〔都立教育研究所〕

高岡市古書古文獻シリーズ 第一・二集

〔市立高岡図書館〕

〔岐阜県〕本巣町史 通史編・史料編・附録

高知市議会史 上・中・下巻・史料編

村山市史編集資料 第一・二号

狛江市史料集 第一～第三

新選組研究 №九・十〔三十一人会〕

明治期刊行図書目録 第一巻～五巻〔国立国会図書館整理部〕

保古飛呂比 佐佐木高行日記 六・七

〔東京大学史料編纂所〕

日本関係海外史料 オランダ商館長日記

訳文編之二〔上〕・〔下〕〔同右〕

大日本古記録 言経卿記九 民経記一

〔同右〕

大日本史料 第二編之十九・第十編之十五・第十一編之十五〔同右〕

大日本古文書 大徳寺文書之十 東大寺文書之十〔同右〕

大日本近世史料 諸問屋再興調十三〔同右〕

朝日新聞記事集成 第二集〔枚方市史編纂委員会〕

近世史料 IV〔茨城県史編さん近世史第一会〕

津島市史 (5)通史篇

新修尾道市史 第四巻

武蔵府中叢書 第二・三巻〔府中市企画課〕

神奈川県史 資料編三 古代中世〔三上〕

・資料編七 近世〔四〕

世田谷区史料 第六集

枚方市史研究紀要 第八・九号

金沢文庫資料全書 仏典第二巻

土浦市史編集資料 第二十四篇 補遺

大館市史編さん調査資料 第十五集

鹿児島県史料集 XV〔鹿児島県立図書館〕

無形の民俗資料記録 第二十集〔文化庁〕

黒崎文庫目録〔栃木県立図書館〕

野口文庫目録〔同右〕

晩霞文庫目録〔埼玉県立浦和図書館〕

埼玉近代百年史〔上・下巻〕〔埼玉近代史研究会〕

群馬県の民家〔群馬県教育委員会〕

〔群馬県〕利根村誌

郡山の歴史〔郡山市〕

ながとろ風土記〔埼玉県長瀨町教育委員会〕

池田市古江町郷土史資料 森家文書・如来寺文書

日生諸島の民俗〔岡山県教育委員会〕

〔奈良県〕野迫川村史

広島県大柿町史

高知県漁民運動史料集成〔高知県漁業協同組合連合会〕

高知県漁業発達史〔戦後編〕〔同右〕

〔福岡県〕鞍手町誌 上巻

川内市史 古文書編・石塔編

大宰府の文化財〔九州歴史資料館〕

大宰府史跡 第三十・三十一・三十二次

発掘調査概報〔同右〕

酒田の歴史〔本間美術館〕

琴丘の民話〔秋田県琴丘町教育委員会〕

和歌山県農業協同組合前史

和歌山県農協二十年史

釧路湿原総合調査報告書〔釧路市立郷土博物館〕

原野利用農業の展開と土地問題〔九州農政局〕

三藩平定部における「構造改善」と土地所有土地保有問題〔同右〕

日光東照宮境内七堂塔控訴事件判決

会員名簿〔日本百貨店協会〕

林業文庫シリーズ №一～五〔林野資料館〕

埋蔵文化財発掘調査報告書 第二十一・二十二・二十四集〔青森県教育委員会〕

磐田市誌シリーズ第一・二冊

神岡鉱山写真史〔三井金属株式会社〕

北海道のやきもの〔北海道開拓記念館〕

鋳をつくる〔FDデザイン機構〕

青森県議会史

原始の世界―縄文時代中期の自然と人間―〔埼玉県立博物館〕

国文学研究文庫目録〔国文学研究資料館〕

国文学文庫資料所在調査目録〔同右文献資料部〕

天保五年秋田藩の凶作一揆をめぐる一藩士の上書〔高橋秀夫他〕

但馬村岡藩三百五十年山名祭趣意書〔山名祭奉賛会事務局〕

高橋重賢書簡〔一〕〔谷沢尚一〕

長崎県地方史研究家名簿〔長崎県立図書館〕

図書館利用案内 一九七二〔京都大学附属図書館〕

大正大学図書館利用案内

山口県立山口図書館〔他〕利用案内

尼崎市立地域研究史料館〔要覧〕

鹿児島県明治百年記念館資料収集のお願

北見工業大学 研究報告・研究業績総索引

仙台の文化財展〔仙台市博物館〕

要覧〔徳島県博物館〕

博物館のしおり〔浦和市立郷土博物館〕

鳥取県立博物館案内

京都国立博物館蔵品図録〔昭和四十九年度〕

郷土資料叢書 第八輯〔新庄図書館〕

住田風土記 第三集〔青森県住田町教育委員会〕

委員会〕

週刊アルファ 二二三

流山市史料集 第六集

松山市文化財調査報告書 V、VI

経済史文献解題 昭和四十七・四十九年

版〔日本経済史研究所〕

青梅市史料集 第十六・十八号

静岡市史 近世史料二

〔島根県〕広瀬町シリーズ 巻七

会津藩家世実紀〔同編纂委員会〕

岩国藩の法令集 (1)〔岩国徴古館〕

埼玉県史料集 第七集〔埼玉県立図書館〕

総合民俗調査報告書 第六号〔大谷大学民俗学研究会〕

研究資料 第七集〔宮崎県総合博物館〕

群馬県立博物館研究報告 第十集

茨城県史 市町村編Ⅱ

輪島市史 資料編第四巻

神奈川県史料 第十巻 索引編

佐賀県史料集成 古文書編第十六巻〔佐賀県立図書館〕

日光叢書 第十五巻〔日光東照宮社務所〕

埼玉県教育史資料 近代篇(2)

八尾市史〔近代〕 史料編(Ⅱ)

川内市史料集 六

文化財シリーズ 九・十三〔杉並区教育委員会〕

委員会〕

巻町双書 ②館柳湾資料集

徳山市立図書館叢書 第二十集徳山御選

付一件

秋田県能代市所在大館遺跡第四次発掘調

査概報〔能代市教育委員会〕

長野県教育史 別巻一

新北海道史 第五巻通説四

秋田県林業史 下巻

洲本市史

横浜の空襲と戦災 第三・六巻〔横浜市横浜の空襲を記録する会〕

広島県史 近代現代資料編

鳥取県史 第九巻

福島市史〔通史編〕 近代Ⅱ

弘前市教育史 上巻

成田市史 近代編史料集二 教育Ⅰ

大田区史〔資料編〕 平川家文書Ⅰ

〔北海道〕上磯町史 年史編

高知県史 近世史料編

明治前期京都府林政史資料〔山田達夫〕

大日本維新史料 類纂之部井伊家史料九

〔東京大学史料編纂所〕

藤沢市史料集 (1)〔藤沢市文書館〕

熊本県議会史 第四巻

和歌山市史 第五巻

原野農芸博物館図録・第九集

〔住友銀行行史編纂資料〕江戸札差と住友家

秋田城跡発掘調査概報 昭和四十九年度

〔秋田市教育委員会〕

能代市史資料 第六号

蔵書目録〔国立教育研究所〕

川北文書目録 (2)〔高知県教育委員会〕

近代役場文書目録〔天童市史編さん委員会〕

会〕

埼玉県地方金融史料目録〔埼玉県文書館〕

広島修道大学所蔵武井文庫目録

大光寺文書目録〔宮崎県教育委員会〕

郷土〔豊中市・大阪府〕関係資料目録

〔豊中市立図書館〕

茨城大学所蔵菅文庫漢籍分類目録

近畿大学中央図書館地方史目録

長崎県文書資料所在目録〔長崎県立図書館〕

館〕

中央大学参考資料目録 和文篇

豊橋市民文化会館図書目録 社会科学

〔上〕

図書館学等参考資料分類別一覽〔未定稿〕

〔東北大学附属図書館〕

深山文庫図書目録〔名古屋市鶴舞図書館〕

加越能文庫解説目録 上巻〔金沢市立図書館〕

群馬県郷土資料総合目録 追録一・三

〔群馬県図書館協会〕

大山文庫目録〔栃木県立図書館〕

郷土資料蔵書目録〔日上市立図書館〕

岡山県総合文化センター増加図書目録

第一巻・三巻

近藤栄蔵文庫目録〔同志社大学キリスト教社会問題研究会〕

郷土資料目録〔竹田市立図書館〕

群馬県立図書館 蔵書目録 一九七三年

四月・一九七四年三月

長篠戦後四百年史〔新城市郷土研究会〕

讃岐権人 久米栄左衛門翁〔西山光衛〕

山名豊国〔小坂博之〕

間宮林蔵〔人と歴史シリーズ〕〔清水書院〕

鉄鋼一代今昔物語―日本鉄鋼業百年側面史―〔水津利輔〕

資料調査報告書第一・二集〔鳥取県立博物館〕

品川区文化財調査報告書〔昭和四十九年度〕〔品川区教育委員会〕

白河市略年表〔江戸・明治・大正時代編〕

近代フランス名作版画展〔千葉県立美術館〕

九州芸術工科大学一九七四〔一覽〕

国学院大学概要 昭和四十二年度

資料案内シリーズ 十三・十五〔天理参

考館〕

高木家文書調査報告 IV〔名古屋大学図書館〕

弥谷寺所蔵聖教等調査報告書〔香川県教育委員会〕

金比羅宮所蔵古文書等調査報告書〔同右〕

周煌琉球国志略 中〔沖縄県立図書館〕

夏子陽使琉球録 下〔同右〕

京都の漬物〔京都府立総合資料館〕

図録郷土の絵馬〔上田市立博物館〕

県内画家による埼玉景勝三十選展〔埼玉県立博物館〕

ふるさとのこまいぬ〔京都府立丹後郷土資料館〕

List of Exhibits in the Special Exhibition of the National Diet of Japan

〔Parliamentary Museum〕

銀行実務 一〇・五・七・九〔銀行研修社〕

初期華族会館関係資料展示目録〔霞会館〕

要覽 昭和五十年(徳島県博物館)

仏教文化論集 一〔川崎大師教学研究所〕

埼玉県文化財目録〔埼玉県教育委員会〕

埋蔵文化財調査報告書 二〔成田市教育委員会〕

委員会〕

成田市の文化財 第六輯〔同右〕

滋賀県文化財目録〔滋賀県教育委員会〕

岡山市文化財目録〔昭和四十九年版〕

〔岡山市教育委員会〕

川北文書史料 第一巻〔高知県立図書館〕

沖繩県史 第七・十巻

山口県内所在史料目録 第二集〔山口県文書館〕

鳥取県立博物館所蔵品目録 十二・十三

奈良女子大学増加図書目録 昭和四十八年度

郷土資料目録 第十二集〔彦根市立図書館〕

山梨県立図書館蔵書目録 第四巻

金沢大学図書目録 第十二巻

資料目録 古文書之部第二集〔神奈川県立文化資料館〕

藤沢市史資料所在目録稿 第八・九集

神奈川県立図書館蔵書目録 和書の部第七

明治大学刑事事博物館目録 第四十三・四十四号

歴史資料館収蔵資料目録〔福島県文化センター〕

弘前図書館郷土資料目録 別巻

市立旭川郷土博物館所蔵品目録 IV

北海道立図書館蔵書目録 第七分冊

北海道開拓記念館一括寄贈資料目録 第八集

昭和四十九年度 国史学会大会研究発表要旨

東北における維新変革の一形態〔松尾正人〕

田法雅話附録地理大概合冊〔福岡地方史談会〕

済民草書 (2) (5)〔同右〕

龜陽文庫のしおり〔亀井南冥と一族の小伝〕

天橋義塾〔京都府立丹後郷土資料館〕

山形県立博物館利用案内

〔福岡県〕朝倉町町史資料 第五・六集

東京市史稿 市街編第六十六・産業編第十九

山形県史 本編五・六

図録日本の貨幣 六〔日本銀行調査局〕

越谷市史 一通史(上)

郷土(民俗)博物館〔日本観光文化研究所〕

都市紀要 二十四〔東京都〕

学芸百科事典 十五〔旺文社〕

歴史の息づく町なみ〔大阪府文化振興室〕

明治十三年東京府管内全図〔東京都公文書館〕

甲斐の祖暁禅師〔都留市教育委員会〕

赤平八十年史〔赤平市史編さん委員会〕

茨城県教育関係係布達目録 史料目録二〔茨城県歴史館〕

栃木県立図書館所蔵郷土資料目録 第二集

足尾鉾毒関係史料目録〔足利市史編さん委員会〕

委員会〕

新聞記事資料所在目録〔同右〕

図書目録(和書の部)〔建設省土木研究所分館〕

大隈文書目録補遺〔早稲田大学図書館〕

東京学芸大学購入雑誌目録 一九七五

東京都立中央図書館蔵書目録(一九六六

一九七〇)総記・社会科学・自然科学・工学・産業・芸術・語学・文学

郷土資料蔵書目録 第一・二集〔新発田市立図書館〕

鯖江市史料所在目録 第二集

郷土資料目録〔武生市立図書館〕

特別集書 沼津文庫目録〔沼津市立駿河図書館〕

名古屋市逢左文庫漢籍分類目録

竜谷大学社会科学研究所蔵書目録 一九七三

大阪府立大学増加図書目録 第二十八・二十九集

広島市立中央図書館蔵書目録 第一巻

収蔵資料目録 1〔瀬戸内海歴史民俗資料館〕

川西市史編集資料目録集 五(別冊二・三)・十二

中根家文書目録〔岡崎市教育委員会〕

川西統計資料集 第一集・四集〔川西市史編集室〕

東北大学所蔵和漢書古典分類目録

沼津本町資料 付沼津三町の考察〔沼津市立駿河図書館〕

堂島米商会所日記 (1) (5)〔関西大学経済政治研究所〕

日本の歴史 十七〔小学館〕

特別買上文庫目録 諸家拓本・諸家書画〔東京都立中央図書館〕

水産庁水産資料館所蔵古文書目録・同資料目録 第一巻〔水産庁水産資料館〕

増野家文書仮目録 一九七四、五、一二

日本外交文書 大正十年第三冊上巻〔外務省〕

日本住宅の歴史〔平井聖〕

鳥取の明治風俗展〔鳥取県立博物館〕

上山市史編集資料 第十一・十二集

新庄市萩野 広野家文書 第一集〔新庄市教育委員会〕

最上郡史料叢書〔同右〕

須賀川市史 近代・現代1

福島県教育史 第四・五巻〔福島県教育センター〕

常陸太田維新後の歩み

群馬県文化財便覧 一九七〇

秩父市史 続編二

浦和市史 第一巻

関口日記 第五巻〔横浜市文化財研究調査会〕

(富山県) 続・八尾町史

(石川県) 押水町史

嘉永七甲寅歳地震之記〔沼津市立駿河図書館〕

参考伊乱記〔沖森文庫〕

埋蔵文化財発掘調査概報 一九七五〔京都府文化財保護課〕

河内木綿〔東大阪市教育委員会〕

和歌山県指定文化財調査報告書 十一集
栃木県史 史料編 中世二・近世三・四

・近現代五

伊場遺跡第六・七次発掘調査概報・同出

土品の解説目録〔浜松市教育委員会〕

埼玉県立浦和図書館五十年誌

国学院大学考古学資料室要覧

青森県民俗資料図録 第二集〔青森県立

郷土館〕

図録〔成田山靈光館〕

北薩地区有形民俗資料調査報告書〔鹿児島

島県明治百年記念館建設調査室〕

埼玉県立文書館概要

農業成長の諸条件〔エスター・ホズラッ

プ著安沢秀一・みね共訳〕

旧南部藩盛岡城下小路土族屋敷調査報

告書〔盛岡市教育委員会〕

千葉県史料 金石文篇 1

安芸郡北川村資料調査報告書〔高知県立

郷土文化会館〕

慈光寺蜂須賀家・藩士墓出土遺品の研究

〔山川浩美〕

大和下市史 資料編

資料展むらとまちと目録〔東北歴史資料

館〕

群馬県教育史 第一巻～三巻

世田谷区史年表稿 解説・図表索引付

柏原市史 第四巻 史料編〔I〕

滋賀県議会史 第一巻～三巻

〔石川県〕富米町史 資料編

東大阪市史資料 第三集〔5〕

江戸川区郷土資料集 第七集〔以下次号〕

彙 報

○昭和五〇年度事業（その二）

一、史料の収集

「水野成夫氏収集記録」全四七冊の寄贈を受けた。別記（一〇頁）のように、「山鹿語類」写本を中心とするもので、未亡人水野はな氏のご好意によるものである。また、「真田幸治氏所蔵信濃国松代真田家文書」「長野市真田宝物館所蔵信濃国松代真田家文書」（大名）ならびに「京都市東山区柏原家文書（商家）」のマイクロフィルムによる収集を行なった。

二、定期刊行物の発行

1 「史料館所蔵史料目録」第二十四集に、「信濃国佐久郡下海瀬村土屋家文書」（名主）約五、〇〇〇点を収録
2 「史料館所蔵史料目録」第二十五集に、「美濃国多芸郡島田村千秋家文書」（地主）約三、〇〇〇点を収録
3 「史料館所蔵史料目録」第二十六集に、「下総国相馬郡藤代宿飯田家文書」（本陣・名主）約八、〇〇〇点を収録
なお、第二十四集は前年度未発行予定を変更、第二十六集は飯田家文書の前半しか収録できなかった。ご迷惑をかけた点お詫びします。

4 「史料館報」第二十四号（本号）

史料の一部の閲覧停止について

前々から本誌などを通じてお知らせして来ましたが、来年度は西館の地上部分が建設されることが、ほぼ確実となりました。これにより、三号書庫の取り壊しも必定となり、その準備のために同書庫に収納してある史料を中心に、一部の史料を梱包封鎖することになります。当館としては、閲覧利用者のご便宜を考え、閲覧停止の措置は、できるだけ避けるよう努力して来ましたが、用地・予算などの事情により、これ以上回避することは不可能となりました。三号書庫の史料も、その一部は他の書庫の空間を利用して移動するなど最大限の努力をいたしますので、何卒ご理解下さるようお願いいたします。

しかし、一・二号書庫の史料を中心に、来年度も閲覧業務は続けられる予定になっていますから、これ迄通りご利用下さるよう、合せてお願いいたします。

なお、前記封鎖史料の閲覧再開については、北館改修工事との関係もあって、期日は確定いたしかねますが、早くても五二年末ごろになると考えられます。

このほか、史料の閲覧についてご不審の点は、情報閲覧室へご遠慮なくお尋ね下さい。

○閲覧業務停止のお知らせ

書庫内燻蒸の実施および西館新築（予定）にともなう一部史料の移転、第三史料庫の閉鎖などにより、左記の期間の閲覧業務を停止する予定ですのでお知らせいたします。

五月一日（土）から四日（火）まで
五月一七日（月）から三十一日（月）まで

○第二十二回（昭和五一年度）近世史料取扱講習会の実施予定について

今のところ開催地について左記のことが内定しています。

第一会場 岡山市
第二会場 東京都〔九月下旬から〕

なお、会場・講習内容・講師・申込方法などについての詳細は確定次第、地方公共団体・大学などを通して、おって連絡いたします。

史料館報 第二十四号

昭和五一年三月三十一日 発行

編集・発行

東京都品川区豊町一ノ六ノ一〇

国文学研究資料館内

国立史料館

電話（七八三）九一〇六（代）

印刷所 株式会社三協社

東京都中野区中央四六六

電話（三八三）七二八一（代）